萬葉拾穗抄 十五

遣新羅使人等 ○本表題ニ天平八年丙子夏六月遣新羅國之時ホ
トヽギス鳴歌一首并短歌トアルヲ左ニ引出シテ神功皇后新羅ヲ征伐シ玉ヒシヨリ
ニ韓吾朝ニ事ヘ貢調ヲ奉ルコト毎年使ヲ出シ貢ヲ奉ルコトヽナリ聖武
天皇ノ御時ニモ亦使ヲ出シ貢ヲ奉リシニ天平七年二月新羅ノ使
金相貞トイフ者多ク新羅ノ物ヲ賫ク王城國ト
イヘルヲ改メテ使ヲ出シテ天平八年二月ニ従五位
下阿倍朝臣継麻呂ヲ遣新羅大使ニ正六位上大伴宿禰三中
ヲ副使トシ従六位上壬生使主宇太麻呂ヲ大判官正七位上
大藏忌寸麻呂等ノ次官五位六位ヲ四十五人新羅ヘ
ワタサレタルヨシ續日本紀第十二ニモ見エテヨリ此集
乃遣新羅使ノ作ノ歌ノ多キモ新羅ヘ使ヲ
常ニヲクラレシヨシ吾朝ノ使ノ船ヲトヾムルコトヽ
天平九年六月此使ノ次官ヨリ大使継麻呂ニ従ヒ
テ帰朝ノ時ニ至リ病ヲ流シテ入京ト
アルヨリシテ大判官小判官ノ事ヲ記シタルヨリ始メヨリ
次官ノ事乃至ル所ノ景ヲ記シタルニ非ス
ケル事乃意見ヲ述ヘタルヿ或ハ其ヲ
征伐ヲクハシクノセンヨリヲ初メトシテ續日本紀ノ事ニ
アヤマレルヲ正シタルノ徒ノミニアラス
徒ヲヤハラケンヨリハ二人ノ情乃移ノヨクホレ
タルヲ書テ此ノ如クニ此ノ歌ヲ作リ
出シ所以ヲ見ヨ ○ホトヽギス鳴歌ハ主ノ情ヲ
古歌トイヘル天平乃新作ノ長歌ヲ指ス
ヨリテ此ノ歌ノ下ニ反歌ヲ指ス小字ヲ
ヨリテ此ノ歌ノ下ニ反歌ヲ指ス小字ヲ
又新羅乃使續日本紀ニハ二月トアルハ使ヲ
ヽリ出ス日ヲ六月トアルハ進発ノ時ヲ
ヽリ出ス日ヲ

3585　3584　3583　3582　3581　3580　3579　3578

むこのうらの入江 此
童蒙抄云むこ浦は津の
国にあり すどりは洲
にすめる鳥をよめり
祇曰入江のすどりを
我君にたてよめり
女乃舟遊　萬葉之そ
そるとハそてやる也
次乃哥ハそへてと打て
ゆかまし物をとあるに
てマ以つ一
おほ船に妹のる物よ
祇曰是ハある也新羅
乃使者ハいふる也
妹をのするなりおき
るすをよめり

萬葉集巻第十五

遣新羅使人等悲別贈答及海路陳思并當時所誦之古歌

贈答歌十一首

作者未詳

武庫能浦乃入江能渚鳥羽具久毛流
むこのうらの入江のすどりはぐくもる
伎美乎波奈礼弖古非介之奴倍之
きみをはなれてこひにしぬべし

大船尓伊母能流母能尓安良麻勢波
おほぶねにいものるものにあらませば
羽具久美母知弖由可麻之母能乎
はぐくみもちてゆかましものを

君之由久海邊乃夜杼尓奇里多々婆
きみがゆくうみべのやどにきりたたば

君かゆく海辺の宿の霧
女乃そ之歎くるゝ也
あまきといへる也
秋さらハあひみん
使乃帰らん秋まて
らハ侍まて見ん也
おほふねをあるま
女乃そ之あるまし
海へつむまかくハて
ちり思ひまてるを
まさきくて妹か祝ハ
幸まて妹か祝ハ
そとへ亦使のいてし
ちへふ立ハ打よる也
わかれなハうらかなしん
亦女の舟し下ふそとの

安我多知奈氣久伊伎等之理麻勢
あがたちなげくいきとしりませ

秋佐良婆安比見牟毛能乎奈尓之可母奇里尓多都倍久奈氣伎之麻佐牟
あきさらばあひみむものをなにしかもきりにたつべくなげきしまさむ

大船乎安流美尓伊太之伊麻須君都追牟許等奈久波也可敞里麻勢
おほぶねをあるみにいだしいますきみつつむことなくはやかへりませ

真幸而伊毛我伊波伊波伴於伎都奈美知敞尓多都等母佐波里安良米也母
まさきくていもがいははばおきつなみちへにたつともさはりあらめやも

和可礼奈婆宇良我奈之家武安我許呂母之多尓乎伎麻勢多太尓安布末弖尓
わかれなばうらがなしけむあがころもしたにをきませただにあふまでに

わぎもこがしたにもきよとおくりたる
ころものひもをあれとかめやも

とハ神字と
まちもこひつゝも
亦使乃菅し葉を
そよきこすきんそ
わかゆへにおもひなやせそ
女を慰めて使の読る
續日本紀に天平
八月に新羅へつかはしとあれ
ハ秋の頃にかれと女を
慰みそてよめるなるや
ふかきおもひつゝきへ
栲衾新羅と日本紀にかけり
ふすまといふハしらきといふ詞
しろきといふをかけて別也
あらくいひてもたとへて女乃
そへて別れをかなしむ
心へて別れにいでたち

3586
ころもの ひもをあれとのめやも
わかゆへに おもひなやせそ 秋風乃
ふかんその月 あはんものゆへ

3587
多久史須麻　新羅
たくふすま しらきへいます きみかめを
けふかあすかと いはひてまたん

3588
波呂々々
はろはろに おもほゆるかも しかれとも
異情　安我毛波奈久尓
けしきこころを あかおもはなくに

3589
ゆふされハひくらし
夕日大和より出へ出
るなかに伊駒山をこゆる
ころ妹の目をほり
ハ見まほしくてなり
3590
いもにあはすハ
岩根ふむいこまの山を
こえてそわかくれハ
暫還私家陳思歌と有
そは還りて家に
妹にあはすハせん
すへなしとて家に
かへりてそ
3591
妹とありし時もあれ
妹と二人ありし時も
わかるれハ衣手の

一首
秦間満
比具良之　伊故麻
ゆふされハ ひくらしきなく いこま山
安我　伊毛我目
こえてそあかくる いもかめをほり

暫還私家陳思歌一首
作者未詳
いもにあはす あらはすへなみ いはねふむ
伊故麻乃山　安我
いこまの山を こえてそあかくる

臨発時作歌三首
作者未詳
いもとありし 時はあれとも わかれてハ
ころもてさむき ものにそありける

海原

うなばらふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも

阿倍仲麻呂

大伴

おおともの三津に向かへる娘子らが放つ髪の見えつつもとな

作者未詳

旅行

旅にして物恋しきに山下の赤のそほ船沖を漕ぐ見ゆ

羈旅

天離る鄙の長道ゆ恋ひ来れば明石の門より大和島見ゆ

作者未詳

船

天の海に雲の波立ち月の船星の林に漕ぎ隠る見ゆ

柿本人麻呂

船上

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも

柿本人麻呂

作歌八首

作者未詳

ももしきの大宮人は多かれど心に乗りて思ほゆる妹

笠女郎

我が背子を大和へ遣るとさ夜ふけて暁露に我が立ち濡れし

大伴坂上郎女

ぬばたまの夜霧の立ちておぼほしく妹が姿の見えぬころかも

作者未詳

八雲立つ出雲八重垣妻籠めに八重垣作るその八重垣を

須佐之男命

万代に照る月かもと思ほしき清き月夜に雲なたなびき

作者未詳

神岳の山辺真麻木綿短か木綿かくのみゆゑに長くと思ひき

大神高市麻呂

わが背子を大和へ遣るとさ夜ふけて暁露にわが立ち濡れし

大伴坂上郎女

そあれうかいはえるむろ　又要云〻〻れる　そ〻れする礒と　祇曰ここ〻い
かりすゑ離れ礒にかりにたてしえんかきむろの木の久しき
ときをうれふるなりとも〻木を見てよめる也十七首　覺云き
あく山吹うつかつも君がみよ過すなりけりとそとりか
うめなるは君がみよを過さる山吹のひとちすなりと覺にかたち
てよめるにて播磨にて〻何〻てすあるくぐるのあれにう
しうる人はあるてきしめやはうるいむらあそとい〻
いふていわやと定家卿乃やういへる〻祇あかはてかゝるへし
仙翁曰うつかるのさき見
安とあれ
志まりしくとも独ありうる
又要云志ましくとも
志ましくもしは暫
時も独在りうる物あれや
しまのむろの木も独
離れてあるらんと也

しましくもひとりありうるものにあれや　しまのむろの木はなれてあるらん

當時(ソノカミ)誦詠(ヨミテ)古謌

詠(ヨル)雲(ヲ)歌一首　作者未詳

奈良

あをによしならのみやこにたなひける
あまのしら雲みれとあかぬかも

あをによし奈良の
天乃白雲をたなひける
見れとあかぬとなり
あを柳の枝きりおろし
又要云ゆ〻しきは
いむ〻き種まき
仙曰ゆ〻しき君といへる
諷にゆ〻しねかきと
いつて〻万葉かなる
妻に〻柳の縁にまき
てよりねい柳の枝お
ろしゆねかきと云
てゆ〻し清〻序也
妹が袖別れて久に
なりぬれど

戀歌三首　作者未詳

安平楊疑　湯種蒔

あをやきのえたきりおろしゆたねまき
忌忌伎
ゆゝしききみにこひわたるかも

妹　素氏　伊毛　比左

いもかそてわかれてひさになりぬれと
ひとひもいもをわすれておもへや

思可麻河　安我

わたつみのうみにいてたるしかまかは
たえんひにこそあかこひやまめ

古歌五首

多麻　平等女

たまもかるをとめをすきて

柿本朝臣人麻呂歌曰　敏馬　須擬反

みぬめをすぎて

我妹子の野辺のさきさきにいりすわれば

又曰

あねもりに

こひくよりは八重柏なる母に逢ひて

玉桑流水の

玉藻なす寄りかく依りも

生田をとめ塚のかたらひし

いりすさび袖巻とむすびつるやも

柿本朝臣一云

寝ぬる夜ぞ多き

柿本朝臣人麻呂歌曰

あをによし奈良の山なる

ももしきの大宮人の

幸行の

絶ゆる日なしに

思ふどち

行きて遊べば

都も思ほえぬかも

柿本朝臣人麻呂歌曰

あをによし奈良の山なる

ももしきの大宮人の

幸行の

絶ゆる日なしに

思ふどち

行きて遊べば

都も思ほえぬかも

奈良山を過ぐる時に

高市連黒人

いにしへの人にわれあれや

ささなみの

古き都を

見れば悲しき

奈良山を過ぐる時に

高市連黒人

いにしへの人にわれあれや

ささなみの

古き都を

見れば悲しき

柿本朝臣人麻呂歌曰

あをによし奈良の山なる

ももしきの大宮人の

幸行の

絶ゆる日なしに

思ふどち

行きて遊べば

都も思ほえぬかも

柿本朝臣人麻呂歌曰

あをによし奈良の山なる

ももしきの大宮人の

幸行の

絶ゆる日なしに

思ふどち

行きて遊べば

都も思ほえぬかも

奈良山を過ぐる時に

高市連黒人

いにしへの人にわれあれや

ささなみの

古き都を

見れば悲しき

奈良山を過ぐる時に

高市連黒人

いにしへの人にわれあれや

ささなみの

古き都を

見れば悲しき

柿本朝臣人麻呂歌曰

あをによし奈良の山なる

ももしきの大宮人の

幸行の

絶ゆる日なしに

思ふどち

行きて遊べば

都も思ほえぬかも

柿本朝臣人麻呂歌曰

あをによし奈良の山なる

ももしきの大宮人の

幸行の

絶ゆる日なしに

思ふどち

行きて遊べば

都も思ほえぬかも

奈良山を過ぐる時に

高市連黒人

いにしへの人にわれあれや

ささなみの

古き都を

見れば悲しき

奈良山を過ぐる時に

高市連黒人

いにしへの人にわれあれや

ささなみの

古き都を

見れば悲しき

柿本朝臣人麻呂歌曰

あをによし奈良の山なる

ももしきの大宮人の

幸行の

絶ゆる日なしに

思ふどち

行きて遊べば

都も思ほえぬかも

柿本朝臣人麻呂歌曰

あをによし奈良の山なる

ももしきの大宮人の

幸行の

絶ゆる日なしに

思ふどち

行きて遊べば

都も思ほえぬかも

奈良山を過ぐる時に

高市連黒人

いにしへの人にわれあれや

ささなみの

古き都を

見れば悲しき

奈良山を過ぐる時に

高市連黒人

いにしへの人にわれあれや

ささなみの

古き都を

見れば悲しき

人丸哥けひの海の朝なぎに
よる舟こぎ出らむ妹乎しぞ念
ありこのうらみまくほりし
八十島かけて漕出らむ
門こゆと妹にはつげこ
人丸哥鳴呼見乃海
こぎ出らむ舟のことに
おもひ念ふ

童蒙抄云 童蒙抄云 此歌ハ
海を云日本紀蒼溟こゝ万葉
と同万葉に或説牽牛乃名とも
あれ月を望の海とあるにより
大判官か説に従ふ

大使副使判官主典
以下遣新羅使乃
大判官ハ土生使主宇

ものまうに文字をもかきそへ
みたらしんう

七夕歌一首 掾本朝臣人麻呂

おほかわのかちきこゆねさうかいも
こきてわたる舟人かこ

備後國水調郡長井浦船泊之
夜作歌二首 大判官

大麻呂也 注

わたつみの神の旅泊の恐
細く念ふを告ずもあらず
うるはしやさる
童蒙抄云 此歌ハ
こゝろ多の如くなれど
アヒハ同音なれど
又安云白玉ひろひて
わらはよ妹もや
風速浦和名安養
ほ云田郷ことに或

奈良 萬也故

おもふにし神の子やこゆくらむ
きよきなぎさゆくへしらずも

作者未詳

夜藉之 麻我久里

海原をこぎ出る舟のかぢをなみ
奈良乃子やこゆわすれ草つむ

おもふにしもかゝるべきかも

北利比

おもふにしもかゝるべきかも

作者未詳

和我

わらはよ妹もや
風速浦船泊之夜作歌二首
風平乃

中良 於伎物 奇里

うつりおきつへきよしありて

おきつせいつくみきせいわきもこゝろ

おけきれきりよありつゝものを

安藝國長門嶋磯邊泊舩作歌

五首 大石蓑麻呂

いそしたもとほる小嶋の

こゝろをしきけいやこゝろかも

京師之 夜麻河泊

やまかはのきよきせいあつて

あふらかやこいわれるもを

伊藤乃麻由 多藝都

いうのまゆきよき山ほとゝきす

故悲 思氣美

こひきけみきつゝなきわたりて

北奥良之

いつのまゆはろるらむ

之麻 伊保利

秋つきてこのよはかりなるらむ

きよきありひろん秋つきて

北奥良之

いつくよをつくかもさしわたる

從長門浦出舩之夜仰觀二月光

作歌三首 余義 比可里 大石蓑麻呂

月よみのひかりをさやけみあきの

加古 伊射里

かこの山ふきこえてきつらむ

山のそに月のかくれぬ

おもほえこそひれもしたへなるさよ
わぎへのそやまねこえこしてれい
おきへりうたりもれをそきり
古挽歌
挽ハ七妻歌一首并短歌
丹比大夫
ゆされいかへまさいきあけてれい
おきたまふまし
可毛
潮麻
之毛
和我尾
わりこふいまもあかうと
きみこそねさへてうちいこい

左宿等布
さねふものをゆくらかぬ
こらくねこそねくも
あもあされひもかてわかれ
いもうませてもあれこそもそてる
まきくひりうしわん
反歌
多都我奈伎安之能
よりあきさりへさてこてわる
あをうくひりさぬれい

屬物發思歌一首并短歌（ツキテモノニコヲヒフ）

作者未詳

（以下、本文は判読困難）

（以下、本文は判読困難）

何のとてる 我こゝろを
心なくやとハ思ふ心な
くさむやうこと
よそのみには よそながらのことを
玉乃うら 八雲云紀
伊 仙覚抄同
なきこ そのまゝ泣ごとし
なく子なす ねのみなかゆ
なまことゝいふ訓也
わたつみのたまき 玉の事也
八雲云諸神乃珠也
萬葉海神の手まき
すきさ拾ふる也
ひろひとる 拾取也
しるしをなみと 玉を拾
拾ふるしるしもなきと
玉乃浦の沖津白玉
ひろへとハ ひろへく
こゝにもちりしま也
やる使なければ持たれ
こゝにもしるしをなみと 又
すてつるといふ也
秋さらハ我舟はてん
わすれ貝 泊乃字 也
船の秋来ハ舟泊て
拾よつきてこゝ也
周防國玖河郡 麻里
遣新羅使の時也
まかぢぬき舟し ゆかず
舟順風にゆけハえやと

こゝろなくやと はやくきて みん
とおもひて おほふねを こぎわが
ゆけハ おきつなみ たかくたちき
ぬ よそのみに みつゝすぎゆき たま
のうらに ふねをとゞめて はまびよ（波麻備へ）
り うらいそを（宇良伊蘇） みつゝ なくこなす
ねのみしなかゆ わたつみの たまき
のたまを いへづとに いもにやらんと
ひりひとり（比里比登里） そでにいれて かへしや
るつかひなけれハ もてれとも
しるしをなみと またおきつるかも

反歌

3628
たまのうらの おきつ（於伎都）しらたま ひりへれど（比利敝礼杼）
またぞおきつる みるひとをなみ

3629
あきさらば わがふね（布祢）はてん わすれがひ（和須礼我比）
よせきておけれ おきつしらなみ（之良奈美）

3630
周防國玖河郡麻里布浦作歌八首
作者未詳
まかぢぬき（真可治奴伎） ふね（布祢）しゆかずハ みれどあかぬ
まりふ（麻里布）のうら（宇良）に やどりせましを

らずとて

いつしかもみんと
阿波嶋 阿波の国也
いつかみんと思ひし
阿波嶋を遠見ゆるく
ゆくよしなければ遊覧
大船よりかぢをさして
かぢをたてゝとりと
いふは舟に立て遠く見須
安波嶋乃あはじと
別ますて又いえあいし
しことに嫁されそ
こあり思へは東
しこいん訊あ
にくちのりれ
可多の大嶋周防に

さよしくこいん訊也
さりとし
妹か家路近くあらは
こ明し
いひとはかへりはやこと
まくゆまつらし記
沼八代川八幡おこる
仙覚抄に周防にもと
萬葉根ゆくを
根ふりくよふるまで
記ひしやかん名とくか
てまと歌也
大嶋鳴門周防大嶋郡なり
これやこの名におふ
童蒙抄云うづしほとは
潮のうづまきまはるとあ

3631 いつしかもみんとおもひし あはしまを（安波之麻） よそにやこひん ゆくよしをなみ

3632 大船にかしふりたてゝ（可之布里多弖天波麻） はまきよき まりふのうらに やどりかせまし

3633 あはしまの あはじとおもふ いもにあれや やすいもねずて あがこひわたる

3634 筑紫道（可太能於保之麻） つくしぢの かたのおほしま しましくも みねばこひしき いもをおきてきぬ

3635 いもがいへぢ（伊敝治 知可久） ちかくありせば みれどあかず まりふのうらを みせましものを

3636 いへびとは かへりはやこと いはひじま いはひまつらん たびゆくわれを

3637 くさまくら たびゆく人を いはひじま いくよふるまで いはひきにけん

過大嶋鳴門而経再宿之後追作歌二首

田邊秋庭

3638 これやこの なにおふなるとの（奈流門） うづしほに（宇頭之保） たまもかるとふ（多麻毛 登布） あまをとめども（安麻）

作者未詳

3639 なみのうへに（奈美） うきねせしよひ（宇伎祢） あどもへか（安杼毛倍香） こゝろがなしく いめにみえつる

おもひめぐらすの
みのまつ男せねど来
通女ごとなり

波乃上ようまね
あとも〳〵家妻ごと
こゝろ〳〵しと忘れ
とつゝそれをたつ人の
美なよんゆるもと
年こよゆん母と
母そのあ
ありこきりの
うまれ海ると同し
根の等と妹と
懐作と

おきつ

叫乃浦未知類衆
小海風ふこと本
吹るまや

おきつ母人のる
船の月へ乃母なの我
うら小板有すとい
やんとく

深玉篇苦物浮也流也
怛曰丁割切悲也
慽曰曰七奚切情悩也
惆曰曰敖周切悲愁也

おきつ

玉余をつれて
今〳〵の妹な逆浪
をこて約まう
旅泊のうきめこと

伊乃米

熊毛浦舩泊之夜作歌四首

羽栗

美夜故へ

今やこゝ乃ゆん船とめ乃つまの
こゑきこゆなり

許登都碍
安可等つ枝
あらそふこゑ乃、へこいもまようまち

可良能宮良尓

おきへより乃ちとめ乃つまの
あさりするらおきてさわきぬ

たきへいわつものろとものさ

いさりけやんさのやとりを
一云多姚夜打里
一云乃やとりをいさりけ
やん

佐婆海中忽遭逆風漲浪漂流経宿
而後幸得順風到著豊前國下毛
郡分間浦於是追怛糞難情悩作歌
八首

雪宅麻呂

おきさみの今とゝのへてこゝろ乃
ゆきのまゝ〳〵風ふきぬ

作者未詳

ゆきかくれまくいとうたて
とそいふ
わきもこにあやもしらせ
伽思いにしらすて
伊勢物語へたる
もくこは船の岩うち
名は舳と付る
あれいへつらすれと
よめる
うつろわこころ
沖は奈須恋路
を貴そ浦とより
いふらんかし
うかりしのおきく
とはいふらんかし

伊勢都可受之 歌
おきつかせ すゝんいへとも
宇良末 欲里
うつろわこころ
おきつ千とりの
ひとりねもこゝろ
伊津波伊加介之
宇奈波良
うかりしおきと
ありてうもせや
可母 自 毛能
おきつ浦なる
可見呂 伎
くろき石
ひさかたの月
ありてうもせや
ねもころに
ねをなく
うらもとに
へゆいもうあらん
至二筑紫一遊望本郷懐恰作歌
四首 作者未詳
之翼 一月
ありあけひと月

乃心も□きこともあえず
辛苦ちる道も
さつ乃うへふさわする
我旅泊りせて
女乃待らんとこひやせん
波疑乃浜松小野て
山さわりあれや妹人
の独乃ん□と思ひ
無物も語る

可之布江にあさる鶴
鳴おと悲しくも
らいき立ましし
一云も同歌

一云今もきぬ

いまもありあきこれの
日具良之 おひの
やまつゝみかひて
可之布 おきこね

七夕仰観天漢各陳所思作歌三首

大使 阿倍継麻呂歌

あきさくさに白露
織女乃つまよ呼て
奉牛乃角のとをれる
ていわれつもりや川
よをこえ人乃あるか
吹て秋花も白る我
宗も七夕の上より
よむり幸みつゝ

うふえて一夜妹よ
山幸松遠集三人九
乃寄ゝ打なみ人九
の今下と小生山度乃遣新羅使四十餘人乃中小野人九とそ
あや 拾遺集ゝ人九人唐乃とし乃山新羅使乃ゝ
山ち乃心八奉牛とし我とそ当乃書へとそ
山あ月歌新立ち会 新ごち会 有小若映

波疑 おきつもとゝろわりこもぬれねとも
奈布利 きみのこゝろ乃とけていゝ

作者未詳

比改保思 等之 ぐ小乃りていよいよこひしく
おもほえましてかくのみやこもり
可気多知 興里安比 小ほゝよりあけゝるあひ乃久
布奈批 等 こゝろもそゝろさ

さほつ舟人こぐ綱手越牽牛をいかにかこのころさとおちぬ
あまの川日ふねこぐ月日毎也
いそてにのつとく乃心こ月の舟ふねらねと月をそ妨つをいて後る事を
かむさふるあしたの神さふるは奈良代の淡海ふるきおれあしたの淡海
出ん上ふ序号
かせ乃ひこそそ
可是能年多
風乃共也重風
そそふるよも

海邊望月作歌九首

大使二男

あまの川日ふねこぐ月日毎也
いそてにのつとく乃心こ月の舟ふねらねと月をそ妨つをいて後る事を

土師稻足

かむさふるあしたの神さふるは奈良代の淡海ふるきおれあしたの淡海
出ん上ふ序号
かせ乃ひこそそ

可是能年多

作者未詳

風乃共也重風
そそふるよも

あまの原ふりさけ見れ春日なる
三笠乃山に出し月かも

一云あまの原ふりさけ見れ春日なる
三笠乃山に出し月かも

ふりさけて見れ春日なる三笠乃山に出し月かも

一云あまの原ふりさけ見れ春日なる
三笠乃山に出し月かも

旋頭歌也

わけもあけぬも
つきてあるとのかうをと
いとしきかも
月へてゆくと
きり乃ふかいさわする
四順

伊能林良

延奴か

安可筭吉能

えねるあり
こさ
いとしきかも

安危宜理其問理可里

あさまりこりかりの祈うちく

ゆさまれいあきうせさもしわもこう

こさのしいろもゆきてくえやさん

心の順し山寺も拾遺 許能安我家流

集うく人丸の哥まて

詞書云ふろこう作

りくる時よりとも

る蓋山新院位さを

あうこうこるわ統

さも續日本紀四萬

葉九抄本人丸こう

位せし人の名ふこを

わうこいふ人ふうあ

りくるいふ我ふるを

姉うまで一首の哥

付うかれ之知之

皎々詩註案白也

流照 俗ふ照る見し

かりまうのこうのこを

遠朝 續日本紀 ふまで

我ふ死ふうめう地

乃ふし統案ふ主ふる

う行副ふある路ふ

う近く住りしは

わけるを立ふるくく

もふあるふいふる

ふもれてふを関よ

やはう立つふこ

つくりのこれ濱

唐泊のこれ濱

筑紫のふこふ家う

けるく 一あるふいこひくるうも

大判官 壬生使主宇太麿

こうあるふ六ふる以ふとふしふる哥を

やみやいもうこいつあるん

作者未詳

能登

かうこうのこれつあみてね月ハ

あるもいへうこいね月いあ

いさうれ月いてりわいふあく

いやれいさうこいふとしあいふ

いせうれいあさうきうふ

のこれるものもあまたもとめぬる

引津亭ニ泊舶作歌七首

大判官

久尤麻久良

こぎてゆけばわれをまつらしこれやこれ

可也

かやのまつばらさやにみえきく

草平思香

於吉津奈美

おきつなみいたくなさわきそのあまと

さとこれいとまきてくんとも

作者未詳

可里平都可比尓

あまをとめやもとつりをつりてえてしも

奈良

あまのこやこころつけやん

波伯

杜の野をみわたすさかきみれはもも

野ノ

しきのおほえぬかもあまのよ

しもおもしろきかもあまのよ

さをさしておさえつつおもはねもさこそ

おもはねもまことまことと

わきもこかやどをみむとぬばたまの

等余米ノ

よをふるつゆにわれぬれにけり

肥前國松浦郡鏡ニ

山にこよひやきよきかもあまのよ

テヒレノ

肥前國松浦郡鏡ニ舶泊テヒレノ之

夜遥ニ望テーヲ海浪各慟イタミテ旅懐作歌七

山ニ舶泊テヒレノ集ニハ載セス人丸ノ歌ト云ヘリ

の作ナラン

鏡山ノ動撰名所集

筑紫ノ糟屋郡ニアリ

引津亭 筑紫ニアリ

万葉抄ニ

よろつよにわれもきたらんいまのみち

のあとをたづねて

3686　3685　3684　3683　3682　3681

慟　玉篇曰徒貢切哀極也
かへりきて見んと
秋ハ稲葉ニみひし小
家日へし見るや
あめつちの神をこひ
こひつゝハも我まち
われやまんハ我待ん
此歌娘子ハ狛嶋亭
乃人なるも知られす
とそりや
きみを思ひわかこひまくハ
次ぎ乃月をへす注
しら一月ことよく一日
もよる日もなく過ぬ
へしとよくるハ避し
秋乃夜をなかみ

首

八多
秦田麻呂

かへりきて見んとおもひしわかやとの
安伎 波疑 須々伎
あきはきすゝきちりにけんかも

娘子

安米都知 可未
あめつち乃かみをこひつゝわかまたん
はやきませきみまたハくるしも

作者未詳

きみをおもひわかこひまくハあらたまの
たつ月ことによくる日もあらし

秋乃夜をなかみにかあらんなそこゝは

なかくてハいのねらえぬ
ものハ思ひのおほきにて
いのねらえぬもひとりぬ
れハかねられぬハ秋
の夜ら独ねハなれや是

たらし姫か舟はてけん
松浦の海ハみるめかれ
なりや 日本紀曰神功皇后北到火前國松浦縣而進食於玉嶋
里小河之側 此所ハ松浦と云なり
妹かまつへきとよめるハ泊乃名之舟とと云る也
袖中抄 此歌乃注ニ御船曰帝皇系図云元年二月皇后自討
新羅幸豊浦宮号與長足姫今かねてりんニハ月
ゆくへをまつとよみくるつる乃誤れるん
たひなれハおもひ絶
旅の中ハ思ひすてゝ

いのねらえぬもひとりぬれはか

多良思比賣 御船
たらしひめみふねはてけん松浦のうみ
いもかまつへき月ハへにつゝ

於毛比
たひなれハおもひたえてもありつれと

こへなるいもしもなかりせば
わがせこにまたいつかあはむ

挽歌

到壹岐島雪連宅滿忽遭疾病死
時作歌一首并短歌

作者未詳 雪連宅滿 筑紫

すめろきの　遠の朝廷と　しらぬひ　筑紫の国に
泣く子なす　慕ひ来まして　息だにも　いまだ休めず
年月も　いまだあらねば　心ゆも　思はぬ間に
うちなびき　臥やしぬれ　言はむすべ　為むすべ知らに
たちまちに　病を発し　あぢきなく　日に異に増る
思ひ妻　若き子どもに　朝夕に　嘆き悲しび
手に持てる　業も知らに　ぬばたまの　黒髪変り
朝の笥に　盛れる飯の　湯漬けも　喉に滑らず
喘き臥し　年月重ね　ここだくも　過ぎにけるかも
あをによし　奈良の都に　行き通ふ　君が姿を
日だにも　見ざれば恋ひし　ましてかく　寝ねず思へば
天地の　神をぞ祈る　いかさまに　思ひ祈らば
たまきはる　命にあるべき　ものにしあれば
我が祈る　しるしをなみと　立ちて居て　すべなきものを
嘆けども　嘆けども　験をなみ　思ひつつ　寝ねむとすれど
目し合はず　安くもあらず　恐きまでに

ぬばたまの　夜渡る月を　留めむと　よしもがもと
思ひつつ　嘆かひ伏せる　枕づく　妻屋の内に
朝雀　さへづる聞けば　いつしかも　我が上に来鳴く
あしひきの　山の木末の　ほよ取りて　かざしつらむと
我が思へる　妹はもあらず　玉桙の　道だに遠く
思ほえむ　かもかくもせむと　すべをなみ　白栲の
手本を折りて　かきつらね　雲に飛ばせ　遠き国より
来む人の　ため

反歌

伊波乃

いそ野かやりすまいにひものいつくわをとりていくたり

…れもろともにねんごろの…とわれぬる
…そうりょ…ありこひゆん
一首并短歌　葛井連子老（クズイノムラジコオイ）
…絶ことにもかかりしおもひて
…ひとりねんものをそけやいへをそ
…くおもひつゆかけさもきふで
安良多麻　あるひ月日もきへぬうねね
都藝比　伎奈　氣婆
…ちねの
…そしてゆふものさしきやまのかけ
…すひちゆまりかこそもてれ

…ほそ　書等
いつちひちひあてし
さきくしもいくそも
…うもちて幸をおも
…れやふかせそれ
ありけりとねぬれや
…書ちといくそ行り
…人は玉ほうり
…くやうりてゆを
…こしされいれぬね
…公しの面野よこう
…あき倍養きくか
…さめ事をこちも
…ちて　ちる
…そけやーつも

伊氣出
てさきくしもいつもんこくく
…そうんものを世間ひと
…けさおひけりねそうあれやも
…きそまれちて野豆乃そうをも
…なるよみきくくそもそれらをさ
…公乃にゆきものさしきやまう
…やうりせんん

反歌

…そけやーにゆもことそくくふ
…んまそや幸かこれぬる

毛波知葉

みちとれちりぬんもよやちりぬる
をわかよたれつねならむ有為のおく
やけふこえてあさきゆめみしゑひもせす

一首并短歌　六鯖（ムツサバ）

わたつみのかしこきみちをやすくも
あくおやきくいはふるもしちくら
ゆんとしまれるものなれてのうらを
かしやきくゆんとすたいいれ
ことみちのうちもわれをもきこ
及歌

むらくものいつるこれうらみの

可良久尓

なみのとこゆるれすの浦
を右ふりみてうくつ
やきこえしおき泊
或説帆手乃なにとい
ふりるふの枕詞用
むらくものいつるう
別い幸苦ちると古
ちりひしるをし
ちくくのかつる
乙安云ちる新羅
也五東新羅ゆくい
家小治んの進退兵
事の心ときいろ
さと日宅治を秋る
物華　ちりく
山海の景氣をえ

しこふわれするつし
新羅奇　由吉能之麻
ちくいふかつるゆきこのよ
ゆんくまてしおりねつし

到對馬島淺茅浦泊船時不得順風
經五日於是瞻望物華各陳客心作
歌三首　作者未詳

毛母布袮　安佐治
安米
意具礼
毛　美多比

ふねはてるあさちの
志ほれのりめよとそ
いしろくいわれまるくる

あきされいをくにゆきたにあつまて
京師
みやこのやまいろにもまたぬるゝん
竹敷浦（タカシキノウラ）泊舶時陳心緒（ノベテ）作歌十八首
大使 毛義知
うちひさの山もこひつゝとをちゆふの
下
ちりのまかひにふるもしらすも
副使 大伴宿祢三仲統
母義知
いつもまのうらをもわれはわすれねと
きみこそこゝろとゝきそこひつる
大判官
小判官（スケイ ツツリコトヒト） 大藏忌寸麻呂統
おもふにしあらねとかくてありこすは
いかゝせよとか
對馬娘子（ツシマノヲトメ） 名玉槻（ハユツキ）
たまのをもゆてゝあはむとおもへとも
ふちのひとりぬてくいてこしものを
たゝまのうらをもわれはわすれねと
きみこそこゝろとゝきそこひつる
小判官
山のまにいかちもとめてゆきしかは
ちりのまかひにふるもしらすも
大使
山のまにいかちもとめてゆきしかは
ちりのまかひにふるもしらすも
副使
いつもまのうらをもわれはわすれねと
きみこそこゝろとゝきそこひつる
大判官

大使

一首

きよきかはきよきこころをきよくてはありすわまゆくかてるまたえん

副使

うきもまれりみちとかさうわうをれいうきみちくゆくるふ

大使

毛能毛布

よりもとひふかしきひものきよゆこふるもきそへよくる

作者未詳

一首

きよきかはきよきこころをきよくてはありすわまゆくかてるまたえん

副使

うきもまれりみちとかさうわうをれいうきみちくゆくるふ

大使

毛能毛布

よりもとひふかしきひものきよゆこふるもきそへよくる

作者未詳

一首

きよきかはきよきこころをきよくてはありすわまゆくかてるまたえん

副使

うきもまれりみちとかさうわうをれいうきみちくゆくるふ

大使

毛能毛布

よりもとひふかしきひものきよゆこふるもきそへよくる

作者未詳

安(ヤス)礼(ラ)ノ濱

あきさればこゑもとどめぬ濱風に
ひさしくなれをわけかねつる

ひとりのみ月をながめてあかすかな
杉保久

おもふこと多由多比(タユタヒ)ぬ九月(ナガツキ)の
あまつそらなるいはしろの毛奈久(モナク)

遥來筑紫海路(ハルバルトツクシノカイロヲキタリテ)入京到播磨國家嶋時作歌五首　作者未詳

[illegible]

中臣朝臣宅守(なかとみのあそみやかもり)、娶(めとれる)二狭野茅上娘子(さのちがみのをとめ)一之時、勅(みことのり)断(ことわりて)二流罪(るざい)一配(なが)二越前(えちぜん)一也。於(ここに)レ是夫婦相嘆(なげき)、易別難(わかれやすくあひがたき)レ会(ことを)、各陳(のべ)二情(こころを)一贈答歌六十三首

臨別(わかるるに)作歌四首

娘子

わかれなばやまずこえんとするものを
こころもちもくやすくしもなき

またもあひてねむとおもへやぬばたまの
よわたるつきをよどもしみかも

ぬばたまのよわたるつきをながしとも
おもはずわれはおもひけらくも

我妻(わがつま)之(の)袖(そで)乎(を)者(は)
まきてそ寝(ぬ)る
わろ寒(さむ)き夜(よ)をひとりかも寝(ぬ)む

わかれなばひとかたしきにならすらむ
さよのころもにあらましものを

この月(つき)は満(み)ちかけしけり
しかすがに妹(いも)が咲(ゑ)まひし
面(おも)わすらえず

上道(かみつみち)作歌四首

中臣朝臣宅守

ちはやぶる神(かみ)のみさかにぬさおきて
いはふいのちは妹(いも)がためこそ

あをによし奈良(なら)の山道(やまぢ)を
くもりあひてわれにおほふないでて
こよ

これやまたわれはゆきなむ

うつしとりつゝ
ゆかばやと
（母等奈）

十四首　中臣朝臣宅守

（武氣）

（伊乃米）

（左頁）

（3741）
（3740）
（3739）
（3738）
（3737）

（右頁）

（3745）
（3744）
（3743）
（3742）

3746 3747 3748 3749 3750 3751 3752 3753

わすもこふ恋ふれハ
現ニる今といふんと
てしあれりく我ニ
今ハ
又安ふそくおもひ
又おこひうと重ね
のちまてハる絶ゑ
人乃極る田ハ極ると
配流ニて往地をてる
うと田ハ極ると手と
いつるや四別ニハ天
越おお我ハ越ふ生を
ふしあれハ我ニ生葉もあき
わうやこの松乃梨
ひとふくまそをいつまてそ
あうこひをんこまれニうく
ハ曽許比
ハ宇良
ハうこひうとあうこと
まそよこふんひとハさねハ
ニうとあうニうおつす
してれうせこてふハまて
ニれ日のうあきふをれて
ニうこひうハ宇都之
ハ家米也
おりん日乃うそよせとわやの
おもひこれてぬこうも

比等
ひとふ田ハうまそすハまてふ
ふわうまくあまハいふせん
わうやのちふ梨ふてわれまえ
ニやハりよせこひニおぬとう
比等久介
ひとふをすそハりとふすもやくく
ニやハりよせこひニおぬとう
須牟也
ひとふくまそをいつまてそ
あうこひをんこまれニうく
ハ曽許比
ハ宇良
ハうこひうとあうこと
まそよこふんひとハさねハ
ニうとあうニうおつす
してれうせこてふハまて
ニれ日のうあきふをれて
ニうこひうハ宇都之
ハ家米也
おりん日乃うそよせとわやの
おもひこれてぬこうも

須牟也
ひとふくまそをいつまてそ
あうこひをんこまれニうく
ハ曽許比
ハ宇良
ハうこひうとあうこと
まそよこふんひとハさねハ
ニうとあうニうおつす
してれうせこてふハまて
ニれ日のうあきふをれて
ニうこひうハ宇都之
ハ家米也
おりん日乃うそよせとわやの
おもひこれてぬこうも

十三首　中臣朝臣宅守

遠所
いまるしふせきこゆるなるさすた我チニホカ
あまちこうねもやまたまかようん
うるとうふいもを山川を
おうへてやすけくもを
むひねく一日しもちすくるも
いとをいさわてまて
うるこうせきまてくこふうめ
こたいもよりものを
さすけ乃大宮人いまもしも
一云いまさくやひとをみ乃のみこみ
こちかうちなけそもあれいもてるこ
おもいもまてくぬるこうおろさ
さぬるよいおろくあれそこのもすす
やすくぬるよいさねるまさこのを
可久左麻尓
よれるみのそれねとわりくさまよ
須恵之多祢可良
すゑのまふくす

右五首

日数を指さんとの思うりん見れくもり
よやめ姫まこうくも
いまるしふせきこゆ
うるこうねもと心救
あり旅人のうくねも
かひちんとものイおう
よこ永も他の男来
し通りと姫もとう
うるとあうとふ
へりて、ひ
むひねく一日し
いとをいさわてまて
こうるこうせきまてくこふうめ
こたいもよりものを
さすけ乃大宮人いまもしも
一云いまさくやひとをみ乃のみこみ
こちかうちなけそもあれいもてるこ
おもいもまてくぬるこうおろさ
さぬるよいおろくあれそこのもすす
やすくぬるよいさねるまさこのを
よれるみのそれねとわりくさまよ
すゑのまふくす

山関山をおりうすうすうち乃関山をも
さすけ乃大宮人の
山関山をおりうすうち乃関山をも
さすけ乃大宮人の
ひとをみ乃みこ
こちかうちなけそもあれいもてるこ
おもいもまてくぬるこうおろさ
さぬるよいおろくあれそこのもすす
やすくぬるよいさねるまさこのを
よれるみのそれねとわりくさまよ
すゑのまふくす

わきもこが　ふりさけみつる　山をこえて
はるかにくれぬ　いもとしおもへば

多婢　許等

ひとつゐに　こころやすきぬ　ももくさの
百草　多婢　許等良尓

ももこととりも　ことめやも

山川を　おふへにありて　こころをも
麻都里太須

こころをちくに　おもほせわきも

まつかげて　おもふものを　ひとにたゆすな
於毛比之　於毛波受

うるはしと　おもひしなをも

ゆひけけもちて　やすきものりせ

わきもこが　ふりさけみつる　山をこえて
はるかにくれぬ　いもとしおもへば

ひとつゐに　こころやすきぬ　ももくさの
百草　多婢　許等良尓

ももこととりも　ことめやも

山川を　おふへにありて　こころをも
麻都里太須

こころをちくに　おもほせわきも

まつかげて　おもふものを　ひとにたゆすな
於毛比之　於毛波受

うるはしと　おもひしなをも

ゆひけけもちて　やすきものりせ

こしイこころよきめやも　苦寸き旅と　思ふらんこころ
山川を　おふへにありて　おもひ山川を　中におへりて
まつかげて　おもふものを　ひとにたゆすな
うるはしと　おもひしなをも　ゆひけけもちて
なてきるすべと　しらくなく

八首　娘子

一ひいひいあらくも　ゆふへにはたゆまれと
ありむねつこひむきは　このころを　なにかもとせむ
こひのみし　つのつねのこころく
ぬるよれとるる　夢をたのみて
あけすまみて　いねらくやしき
安治麻
うちなひき　野ふやとれる　まろかいほりん
河又里

3771
3772
3773
3774
3775
3776
3777

3778 3779 3780 3781

きろくかけるこそもてもちて
いきくるのせこそてふあまくるよ

寄花鳥陳思作歌七首

中臣朝臣宅守

わりやとのをなるろうるいと
知利 須具良年
ちりすくらんひとまし
これもおいこひもおやおらすきす
ものふこきしきるきとるもる
るかてものふこきにおらすきす
もとるあくきそあることきする

3782 3783 3784 3785

ふまことりものふこきたおらすきす
わりすむさるふまきるきとるを
多婢布之良 多婢布之良
るかてふこはうさそ
るすむさるふこよあきわる
こころあきこうまかりるうるひすす
ものふこきたるくへさとのか
おらてきすのひさちりやあけは
あうふこころいさとすあし

萬葉集巻第十五

寛享三年五月十五日書于新玉津島新樹下畢墨付北三枚 秀冷